



第13図 大坂城東外濠石垣

(小浜藩・宮津藩京極家丁場) 橋下付近 (第12図④)、小倉藩細川家が築いた石垣から100個を越える「あしや」の文字刻印がみつかり、兵庫県芦屋での採石を示すものかと注目された。しかし、残念ながら採石場調査のかなり進んだ今日においても、「あしや」のみならず細川家関係の刻印は六甲山系で見つかっておらず、「あしや」刻印の意味は未だ不明と言わざるを得ない。採石場調査における今後の大きな課題である。

大坂城の刻印については、天守閣北側の山里曲輪に刻印石公園が設けられ、城の内外から出土した多数の刻印石サンプルが野外展示されている。その一例に、昭和50年に日本経済新聞社大阪本社ビル建設工事の際に検出された [内田・渡辺・藤井・中村・長山他 1977]、大坂城外郭関連石垣の刻印石が移設保存されており、「あしや」の刻印石も実見することができる (第12図⑥)。これを見ると明らかに六甲花崗岩であるので、今後細川家の採石丁場が六甲で見いだされる可能性も充分考えられる。

また同所には、本書で報告する採石場跡で検出されたものと同じ、肥前唐津藩寺澤家の刻



3-19

第14図 徳川大坂城外郭関連石垣検出
唐津藩寺澤家刻印拓影 (1/5)
〔藤井 1994〕より

うが、濠や石垣をじっくり観察する人は少ない。しかし、外濠の幅は平均数十m、中でも南外濠では幅100m近く、西・東外濠でも内面石垣は30m近い高さで延々と続く (第12図③)。さらに外濠の外周は2.5kmに達する。領地数十万石をもつ西国大藩の居城と比べても圧倒的に大きく、濠の壮大さや石垣の堅牢さではおそらく江戸城をしのぐであろう。そして、この現存大坂城石垣には多数の刻印が刻まれている。濠幅が広いため、その刻印を実際に目にすることはなかなかできないが、それらの刻印を詳細に調査することにより、天下普請で築かれた石垣工事の実態がかなりわかっている。

昭和34年の大坂城総合学術調査においては、西外濠の乾

印石と共に日本経済新聞社大阪本社ビル建設工事に際して出土したもので、小豆島の花崗岩と報告されている。岩ヶ平刻印群にみられるものと異なり、下にベタ丸 (寺澤家家紋「黒餅」) を付けた 了 で、隣接地の調査でも同じ刻印が検出されている (第14図) [藤井 1994]。大坂城でみられる寺澤家の刻印の多くがこの種のものらしく、以前南内濠でも確認されている (第12図⑦)。

一方、東外濠は、現在は復元され満々と水をたたえる姿を見せている (第12図③) が、数年前までは

全面が埋め立てられてグランドとして使用されていたので、グランドを横切って東外濠内側壁面を間近に観察することができた。そこでは、長州藩毛利家・福井藩松平家・松江藩堀尾家・小浜藩京極家・宮津藩京極家・赤穂藩池田家などのおびただしい刻印がみられ（第12図⑤、第13図）、使用石材の大半が六甲花崗岩であったと記憶している。芦屋・西宮の奥山刻印群や岩ヶ平刻印群等から運ばれた調整石がかなりの比率で含まれているものと思う。

南内堀の桜門両側は、濠幅30m程度と比較的狭いため、双眼鏡を使えば本丸南面の石垣を細部まで観察することができる（第12図①②）。さらにはこのあたりのみ空濠となっており、許可を得て濠底へ降りることができるので、藤井重夫氏ら築城史研究会の石垣調査が進んでいる。ここでの石垣をみると、本丸南面東部では、長州藩毛利家の○や赤穂藩池田家の□の刻印が集中しており、遠目に見ても大半が六甲花崗岩であることがわかる。毛利家の採石場は、六甲山系では芦屋の奥山刻印群K地区と岩ヶ平刻印群の一部、芦屋靈園や兵庫県警察学校・芦屋大学付近にほぼ限られることがこれまでの調査でわかつており〔森岡・古川 1998〕、ここの石垣も大部分が芦屋の石で築かれているとみてよいであろう。

2. 徳川大坂城東六甲採石場

この六甲山系のうち、主要な石材採取地となったのは、東半分にあたる西宮市・芦屋市・神戸市東灘区の地域で、昭和43年（1968）以来の芦の芽グループの調査によって具体的な状況が明らかになりつつあるとともに、藤川祐作氏により「徳川大坂城東六甲採石場」として整理されている〔藤川 1980・1982・1985〕。

これまでに判明している採石場は西宮・芦屋市域に集中し、山麓部から標高400mの山頂尾根筋にまでおよび、多数の藩が大規模に採石した様子を窺うことができる。これらは、地形の変化と刻印の分布内容により、東から甲山・北山・越木岩・岩ヶ平・奥山・城山の六つの刻印群に分けられている（第5図）。今回調査対象とした岩ヶ平刻印群以外で、検出刻印から採石大名が明らかになっているものを挙げると、西宮市域の甲山刻印群C・D地区で○を代表刻印とする肥前平戸藩松浦家（第15図②）〔藤川 1985a〕、甲山刻印群F地区では□を使用する筑後久留米藩有馬家・越木岩刻印群では△を代表とする備中松山藩池田家（第15図④）と○の出雲松江藩堀尾家がある。

芦屋市域では、奥山刻印群のA～J地区で○□△△□△○等多様な刻印を使用する越前福井藩松平家の広大な採石場〔藤川 1980〕があり（第16図）、特に標高400～460mの山頂尾根筋を占めるA～D地区では生々しい採石痕跡を残している。また奥山刻印群K地区では、ほぼ○の刻印に限定される長州藩毛利家の採石場〔森岡・古川 1998〕があり、その西側では肥前大村藩大村家の△の刻印も見つかっている。芦屋川を隔てた西側の城山刻印群では、鷹尾山山頂のA地区で日向佐土原藩島津家の⊕（第15図⑤）、城山南東麓のD地区では豊後臼杵藩と丹波福知山藩の両藩葉家が使用した○（第15図⑥）が知られている。また、平成14年度



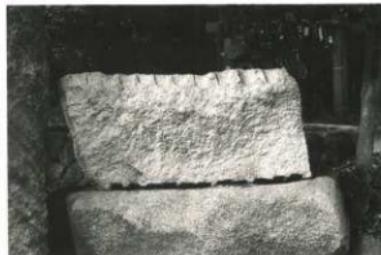
①甲山刻印群A地区



②甲山刻印群C地区（肥前平戸藩松浦家）



③甲山刻印群B地区



④越木岩刻印群（備中松山藩池田家）



⑤城山刻印群A地区No.3（日向佐土原藩鳥津家）



⑥城山刻印群D地区No.1～4（豊後臼杵藩稻葉家）

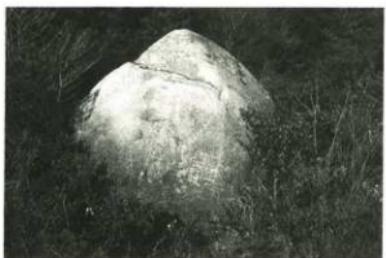


⑦城山刻印群F地区No.2～4



⑧城山刻印群F地区No.6

第15図 甲山刻印群・越木岩刻印群・城山刻印群の刻印石



①奥山刻印群 A 地区No.1



②奥山刻印群 B 地区No.24・25・35



③奥山刻印群 B 地区No.4



④奥山刻印群 B 地区No.22・26他



⑤奥山刻印群 B 地区No.19



⑥奥山刻印群 C 地区No.5



⑦奥山刻印群 B 地区通称五枚岩



⑧奥山刻印群 B 地区五枚岩の穴

第16図 奥山刻印群の刻印石および巨大な割石（いずれも福井藩松平家）

の城山南麓遺跡F・G地点の発掘調査に際して、城山刻印群F地区に相当する部分で「△」等の新たな刻印石が確認されている（第15図⑦⑧）。

さらに西の神戸市東灘区では、中世以来の御影石採石地と考えられる住吉川扇状地で、大坂城再築時も大規模な採石が行われたと推定され、郡家遺跡の発掘調査などで採石遺構とみられる土坑や穴石・割石も検出されているが、刻印は松江藩堀尾家の「△」と岩見浜田藩古田家の「○」とされる（藤川 1985b）。

後述する岩ヶ平刻印群のものも含め、六甲山系での採石が検出刻印から判明するものをまとめると、表2のようになる。

表2 徳川大坂城東六甲採石場において刻印から採石が確認される大名一覧

刻印群	採石藩及び石高	工期・担当間数			主要刻印
		1	2	3	
甲山刻印群	肥前平戸藩 松浦肥前守隆信	63,000	○○○	52間	△
	筑後久留米藩 有馬玄蕃頭義氏	267,500	○×○	116間	□
北山刻印群	出雲松江藩 堀尾山城守忠晴	235,000	○○○	145間	◎
越木岩刻印群	備中松山藩 池田備中守長幸	65,000	○○○	36間	◆
	出雲松江藩 堀尾山城守忠晴	235,000	○○○	145間	◎
岩ヶ平刻印群	出雲松江藩 堀尾山城守忠晴	235,000	○○○	145間	◎
	若狭小浜藩 京極若狭守忠高	92,000	○○○	163間	■ □ ◇
	因伯鳥取藩 池田新太郎光政	320,000	○○○	254間	集 ◇
	肥前唐津藩 寺澤志摩守廣高	123,000	○○○	74間	△
	肥後熊本藩 加藤肥後守忠廣	731,800	○××	308間	○
	播磨赤穂藩 池田右京太夫政綱	35,000	○○○	30間	凸
奥山刻印群	越前福井藩 越前宰相松平忠直	670,000	○××	395間	○○△△
	防長萩藩 毛利長門守秀就	369,000	○○○	227間	○
	肥前大村藩 大村民部大輔純頼 大村松千代純信	27,900	○ ○○	34間	△
城山刻印群	日向佐土原藩 島津右馬頭忠興	30,000	○○○	33間	⊕
	豊後臼杵藩 稲葉彦六典通 稻葉民部少輔一通	50,000	○○ ○	34間	◎
	丹波福知山藩 稲葉淡路守紀通	45,000	×○○	26間	
住吉川刻印群 (仮称)	出雲松江藩 堀尾山城守忠晴	235,000	○○○	145間	◎
	岩見浜田藩 古田兵部少輔重恒	54,000	×○○	22間	○

3. 岩ヶ平刻印群

(1) 調査密度の高い岩ヶ平刻印群

今回調査を実施した岩ヶ平刻印群は、東の越木岩刻印群と西の奥山刻印群に挟まれ、奥山山塊の南東麓から苦楽園・六麓荘・岩ヶ平の台地上を占め、標高は南部の低い所で60m、北西部の高所では標高300mを測る。奥山刻印群や甲山刻印群などと比べると比較的地形変化の少ない緩斜面地が広がり、北東から南西へ走る芦屋断層以南では、大阪層群上に数万年前以降に堆積した段丘疊層中の花崗岩礫を探掘する方式で採石されている点に特徴がある。芦屋断層以北の北部地域は大阪層群が無く、岩盤が露出する瘦せ尾根と広い谷が東西に並ぶ地形をなしている。そして、採石にあたっては主に広い谷を埋積した土石流堆積物中の岩塊を探掘しており、今回の調査地はこの一画にあたる（第10図）。

地形変化の少ない緩斜面であることから、石材の搬出も比較的容易だったと思われ、南東の西宮浜や南の打出浜へ降ろされたものと推定される。

現状は、昭和初年から行われた六麓荘の宅地開発により、広大な邸宅が建ち並ぶ閑静な住宅街が大半を占めているが、自然地形を庭園に取り入れる開発方式が多いことから、未開発区画の山林のみならず宅地再開発に伴って旧庭内に刻印石や関係石材が検出されることも多く、昭和40年代から今日までの調査で80個の刻印石が確認されている（第23図、表4）。六甲山系の採石場では、最も調査密度の高い地域である。

(2) 採石場発掘調査の進展と採石遺構の検出

この岩ヶ平刻印群で調査が進んだことにはいくつか理由があげられるが、発掘調査が行われてきたということが最も大きい。

この六麓荘町・岩園町・苦楽園一帯には、Ⅲ章で述べたように6～7世紀の横穴式石室を内部主体とする八十塚古墳群が分布し、昭和30年代から古墳の調査が断続的に続けられている。この調査の過程で、調査地や周辺に矢穴石・割石や刻印石の分布することが知られ、芦の芽グループ関係者による独自の採石場分布調査も行われて、昭和54年の時点で22個の刻印石が報告されている〔藤川 1979〕。

昭和63年の八十塚古墳群岩ヶ平支群10号墳の調査では、北東トレンチで割石が出土し断面に石材採掘坑が確認された（第17図）〔森岡・和田・古川他 1990〕。それまでは、地表観察のみで刻印石や関係石材を調



第17図 八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳
北東トレンチ検出の割石と採掘坑

査し、探掘坑の存在も指摘されてはいたが、完全に埋没して地表に痕跡を残さない割石や探掘坑が発掘調査により遺構として検出されたことは、ある種の衝撃であった。これより後、六麓荘町での個人住宅建替えや新築が増加するなかで、現状確認や試掘調査に古川が立ち会うことになり、新たな刻印の検出が続いた（岩ヶ平刻印群第2～5次調査）〔森岡・古川 1989、森岡・白谷 1992、和田 1993a、和田 1993b〕。これに誘発されて行った、六麓荘町内における未調査空閑地の踏査においても刻印が見つかり、次項の「伊木三十郎」刻印もそのような中で検出された。平成4年段階の確認刻印石数は44個である〔古川 1992〕。

平成5年夏には、六麓荘町94番地で採石場の発掘調査が初めて行われ（岩ヶ平刻印群第6次調査）、翌年調査報告書も刊行された〔森岡・白谷他 1994〕。この調査は、個人住宅建設に伴う国庫補助による調査で、同年秋の芦屋墓園拡張予定区（奥山刻印群K地区）の発掘調査〔森岡・古川 1998〕とともに、以後の採石場発掘調査に向けて大きな画期をなした。



第18図 岩ヶ平刻印群第10次調査検出採石土坑1



第19図 岩ヶ平刻印群第10次調査検出採石土坑2

平成11年の芦屋大学サブグランド建設に伴う調査（岩ヶ平刻印群第10次調査）では、旧知のものを除いて6個もの刻印石を検出（出土）したが、それ以上に、二カ所の顕著な石材採掘坑を検出したことに大きな意味がある（第18・19図）。ともに、大半が埋没していた巨石を掘り出し、何段階かに分けて矢穴穴を入れて割りつつ、調整石を造ってゆく工程が、手に取るように見える遺構であった〔竹村・古川 1999〕。それまでに検出されていた石材採掘坑は、目的石材（調整石）を取り出した跡の残材のみが残る遺構であった。しかし、ここで検出したものは、作業の途中で放棄されたものであったため、目的の形状と寸法を満たす調整石を、いかに効率的に割ってゆくかという、裁断工程が明瞭

に判明する説得力のある遺構といつてよい。花崗岩の採石場遺跡を発掘調査すれば、このような遺構が検出されるという、典型的な事例を示すこととなり、採石場遺跡発掘調査の意義を強烈に印象づけられた。正式の発掘調査報告書は未刊であり、一刻も早い資料公表が望まれる。

平成13年春の六龍荘町94番地の調査（岩ヶ平刻印群第11次調査）では、発掘調査によって検出した採石遺構は近世末から明治頃のものと思われたが、No.19刻印石に旧知の回とは別面に新たな刻印（）が確認された。それが、同一石に若狭小浜藩と因伯鳥取藩の刻印が刻まれるという前例のない状況であったこと、さらには南に隣接する山林内の分布調査で8個もの刻印石が新たに見つかり、No.19と同じく同一石に小浜藩・鳥取藩の刻印が、こちらは同一面に並んでいる（Na64）のを確認したことから、両藩の採石領域境界を示すものではないかと考えられた。その点については次項にのべるが、採石場内における各藩の採石領域が判明するという新たな可能性が示されたことは、この調査の大きな意義であった。ちなみに、翌年に刊行された調査報告書〔森岡・古川 2002a〕では、岩ヶ平刻印群全体の検出刻印数は70個に達している。

（3）「伊木三十郎」刻印について

このように、周辺採石場と比べて著しく進展した岩ヶ平刻印群の調査の中で、特筆すべき事項は、平成2年（1990）に検出された「伊木三十郎」人名刻印と、各採石大名の採石領域推定が可能となってきたことであろう。

「伊木三十郎」刻印は、微妙な表記の変化はあるものの、多くは「伊木三十郎」「石ば」「ニシノ宮内」と三行の文字が刻まれ、発見当初は確認数5個であったものが、平成14年段階では11個に達し、本刻印群での刻印種別検出数の最も多いものとなっている。

伊木三十郎は、当初どのような人物かまったく見当がつかなかったが、その後の調査で、因伯鳥取藩池田家の筆頭家老で三万石を知行した倉吉城主伊木忠貞の幼名ということが判明しており、鳥取藩がこの地で採石したことを明瞭に示す一級資料である〔古川 1992〕。

伊木三十郎忠貞の祖父伊木忠次は美濃の出身で、織田信長の乳母の子として信長に幼少から仕えた池田信輝（勝入斎）の与力として数々の戦に活躍した。信輝が戦死した小牧・長久手の戦いの後は、後継の池田輝政を筆頭家老として支え、輝政が関ヶ原の戦いの大功で播磨一国（52万石）を賜って姫路城に入ると、三木城を預かって3万7千石を領した。

伊木忠次は慶長8年（1603）に死去し、嫡子忠繁が後を継ぐ。池田輝政も慶長18年（1613）に他界し、嫡子利隆が姫路城主となる。この池田利隆・伊木忠繁のコンビで大坂冬・夏の陣を迎えるが、その直後の元和2年（1616）、利隆・忠繁の二人が若くして相次いで病没する。この時点で、藩主利隆の嫡子池田新太郎幸隆は7歳、筆頭家老忠繁の嫡子伊木三十郎は4歳にすぎなかった。そこで幕府は、姫路のような要地を幼少の藩主には委ね難いとして、池田新太郎幸隆（後の光政）を因幡・伯耆の二国32万石に移し、居城は鳥取と定められた。伊木三十郎は三木から伯耆倉吉に移る。

大坂城再築工事は、それから間もない元和6年（1620）に始まって、寛永元年（1624）、寛永5

年(1628)と続いた。「伊木三十郎」刻印は、この間に鳥取藩の伊木三十郎配下倉吉勢が、実際に芦屋へ来て採石したことを示しているものと思われる。

大坂城の工事が終わってしばらくした寛永9年(1632)、岡山藩主の池田忠雄が死去した。忠雄の嫡子光伸が3歳であったため、幕府は23歳になった池田光政を岡山へ、同族(従兄弟)の光伸を鳥取へ移す交替転封を命じた。こうして、利隆・光政系の岡山藩(31万5千石)と忠雄・光伸系の鳥取藩(32万石)の両池田家が並立して幕末まで続く。伊木三十郎忠貞は、光政に従って備前虫明(岡山県邑久町)へ移り、3万3千石を知行した。光政重臣として岡山藩に重きをなし、岡山藩関係の各種史料にも「伊木長門」として頻繁に登場する。

「伊木三十郎」刻印が知られるまでの六甲山系における採石場調査は、刻印石を見つけることのみに重点が置かれすぎ、採石場そのものから外へ向く視野を持てなかつたといえ、結果的に刻印石や採石場を近世初頭の歴史の中にうまく位置づけることができなかつた。その意味でこの特殊な人名刻印は、極めて具体的な歴史的事実として我々の前に現れ、採石場調査が、文書史料のみでは決して解明されない歴史事象を明らかにする可能性をもつてゐることを示したわけである。これは、六甲のみならず各地の近世城郭関係採石場調査に新しい段階をもたらしたと言つて過言ではなかろう。

(4) 岩ヶ平刻印群における採石大名と採石領域

岩ヶ平刻印群においては、昭和50年代前半段階で既に団(若狭小浜藩京極家)・○(出雲松江藩堀尾家)・□(肥前唐津藩寺澤家)・◎(肥後熊本藩加藤家)など、比較的明確に採石藩を特定できる刻印が見つかっていた。しかし、前述のように昭和54年時点の確認刻印石総数22個〔藤川 1979〕はもちろんのこと、平成4年段階で鳥取藩の採石を明白に示す「伊木三十郎」刻印が検出され、確認刻印数が倍増の44個になった時点においても、「検出される刻印の種類が極めて多様で、一藩が全域を占有したとは到底考えられない。複数の小グループ(藩)が、領域を分け合い、または共有しつつ採石を行つたのであろう」との指摘に止まつた〔古川 1992〕。

一方、西隣の奥山刻印群K地区において、南斜面の中山尾根を中心として山麓部にいたる長州藩毛利家の採石場と採石領域を把握することができ〔古川 1998〕、奥山山頂主尾根周辺から西側に広がる越前福井藩松平家の採石場と明瞭に区分されていた状況が明らかとなつた。

その頃、岩ヶ平刻印群でも前項で述べたような経緯の中で新しい刻印の検出が続き、平成14年春には確認数70個〔森岡・古川 2002〕、本報告では80個に達した(表4)。新しく見つかる刻印は、まったくの新種のものもあるが、回○集①など既出刻印の検出数が増加する場合が多く、結果的には刻印種ごとの分布偏在性が際だつこととなつた。加えて、No19・64刻印石で小浜藩と鳥取藩の刻印が同一石に刻まれている例が確認され、採石領域境界と推定された。そして、それを契機として岩ヶ平刻印群における刻印石の分布状況を再検討した結果、分布範囲の南部では不明瞭ながら、北部ではいくつかの藩の排他的な採石領域が浮かび上がつてくることとなつた(第23図)。

芦屋学園中高部の南東から苦楽園五番町の尾根にかけては、若狭小浜藩京極家の採石領域で回□の刻印が集中する。同じ京極家の採石場と考えられるのが、六麓莊浄水場の西側の谷から南東へ、幅150m長さ1100m程度も細長く伸びる部分で、標高約300~100mと高低差200mにおよぶ。検出される刻印は①が最も多く、回回も見られる。出雲松江藩の採石場は、六麓莊浄水場東側の谷から芦屋学園中高部の北側一帯で、◎の刻印が集中する。因伯鳥取藩池田家の採石丁場は、芦屋学園中高部の西から南側で、小浜藩と松江藩に挟まれる部分である。「伊木三十郎」刻印を始め、大小の類似刻印○が特徴的である。肥前唐津藩寺澤家の採石場は、

表3 岩ヶ平刻印群における採石大名と主要刻印

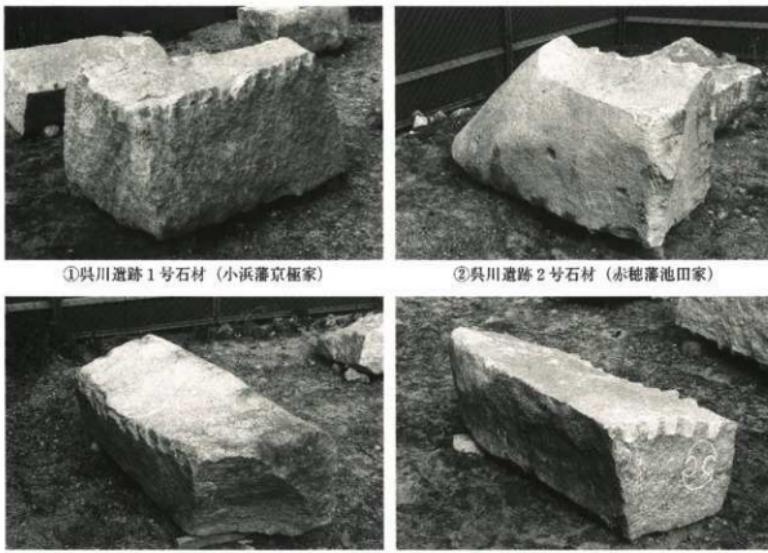
採石大名	刻印種	数	刻印番号
出雲松江藩堀尾山城守忠晴	◎	6	22, 23, 32, 33a, 76, 79
若狭小浜藩京極若狭守忠高	回回	2	26, 42
	回◇	10	7, 14a, 15, 18, 19a, 38a, 63, 64a, 69b, 71
	□	3	14b, 16, 38
	□	4	19c, 50, 53c, 69a
	①	10	6, 12, 13a, 13b, 24a, 25, 48, 53a, 54, 58
	⊕	2	45, 51
	○	1	8
	八	1	24b
因伯鳥取藩池田新太郎光政	葉	11	34, 35, 36, 37a, 39, 46, 56a, 57, 65, 67, 70
	○○	10	9, 10, 11, 19b, 44, 47, 52a, 56b, 64b, 68
	戸	1	37b
肥前唐津藩寺澤志摩守廣高	二二	4	20, 49a, 72, 73
肥後熊本藩加藤肥後守忠廣	○	1	21
防長萩藩毛利長門守秀就	○	1	77
	大	1	78
	スカム	4	2, 28, 30, 31b
不明	□	3	27b, 29, 31
	○	2	3, 5
	△	2	52, 75
	八	1	1
	☆	1	27a
	Ⓐ	1	17

今回調査を実施した六麓荘浄水場の所在する谷で、検出刻印は 二 にほぼ限定される。同じ谷の上方北西側には、肥後熊本藩加藤家の採石場があり、割石や採石遺構は顕著ながら刻印はNo.21の(○)が見られるのみで、唐津藩の丁場との境界も必ずしも明確でない。同様に鳥取藩と唐津藩の採石境界も、もうひとつはっきりしない。

一方、芦屋大学の所在する通称長背尾根を境として、京極家の採石場の西に接するのは広大な長州藩毛利家の採石丁場である〔森岡・古川 1998〕。実際、岩ヶ平刻印群の中に含めても違和感のない芦屋大学構内の尾根上には、典型的な 一 を刻んだ毛利家刻印石があった（奥山刻印群K地区No.19・20）。基本的には、この長背尾根筋を京極家と毛利家の採石領域境界と考えているが、尾根上から若干東側へ下った部分でも 一 が確認され（No.77、第88図④）、No.78の 大 も毛利家関係刻印の可能性が高い（第24図⑦）。あるいは、尾根筋から少し東側まで長州藩の採石領域と見なされていたのであろうか。

以上、岩ヶ平刻印群において現在確認できる採石大名と刻印をまとめたものが表4である。

なお、六麓荘浄水場周辺山林における刻印と採石場の状況については、図版2でもう少し詳しく述べてみたい。



第20図 兴川遺跡出土刻印石

(5) 呉川遺跡と赤穂藩池田家の刻印

この他、採石場では確認されていないが、岩ヶ平刻印群から搬出されたと推定される播磨赤穂藩の刻印石が二個知られている。

その一つは、JR芦屋駅の南方1.2kmに位置する吳川遺跡より出土した石材のうち、2号石材である（第20図②）。この遺跡は、旧海岸線から北へ約500m、標高2m前後の低地で、近世初頭の時点では海岸の砂浜ではなかったかと思われる。おそらく、石材を大坂城へ運ぶため船積みする直前の集石場でなかったかと推定される。ほぼ同所から、昭和62年（9石材、内刻印石6）と平成5年（5石材、内刻印石4）の二回にわたり、合計14個の割石・調整石が出土。刻印は赤穂藩池田家の「」を始め、松江藩堀尾家の「」、小浜藩京極家の「」、長州藩毛利家の「」と帰属藩不明の「」がある。一ヵ所から複数藩の石材がまとまって出土したことと、一石の別面に二藩の刻印が刻まれたもの（第20図④）があるのは注目される。この場所は宮川の西岸を占め、川沿いに上方へ約3kmさかのばると朝日ヶ丘町や岩園町・六麓荘町にいたることから、岩ヶ平刻印群や奥山刻印群K地区から搬出された可能性がたかい[藤川 1991, 森岡・古川 1992]。

もう一つは、西宮市役所前の六溝寺町海清寺にある南天棒石碑である（第21図）。現在は前に装飾瓦が積まれて見えにくくなっているが、正面右下に赤穂藩の「」の刻印が見られ、側・背面は矢穴で削られている。昭和初年に芦屋の六麓荘から運んだ石材で造られたという。

岩ヶ平刻印群では、未だに明確な赤穂藩の採石は確認されていないが、今後これらと同様の「」の刻印が検出される可能性はたかい。

なお、吳川遺跡の石材出土地点から北東へ約200m、宮川の川床に複数の調整石が残っているのを見ることができる（第22図）。今のところ具体的な調査はできていないので、詳細は述べられないが、一部が水面に出ているもの3石、水底に見えているものも2~3石が確認できる。今後の調査で刻印の検出される可能性も高く、吳川遺跡の広がりや性格、岩ヶ平・奥山刻印群からの石材搬出ルートを考える上で興味深い。

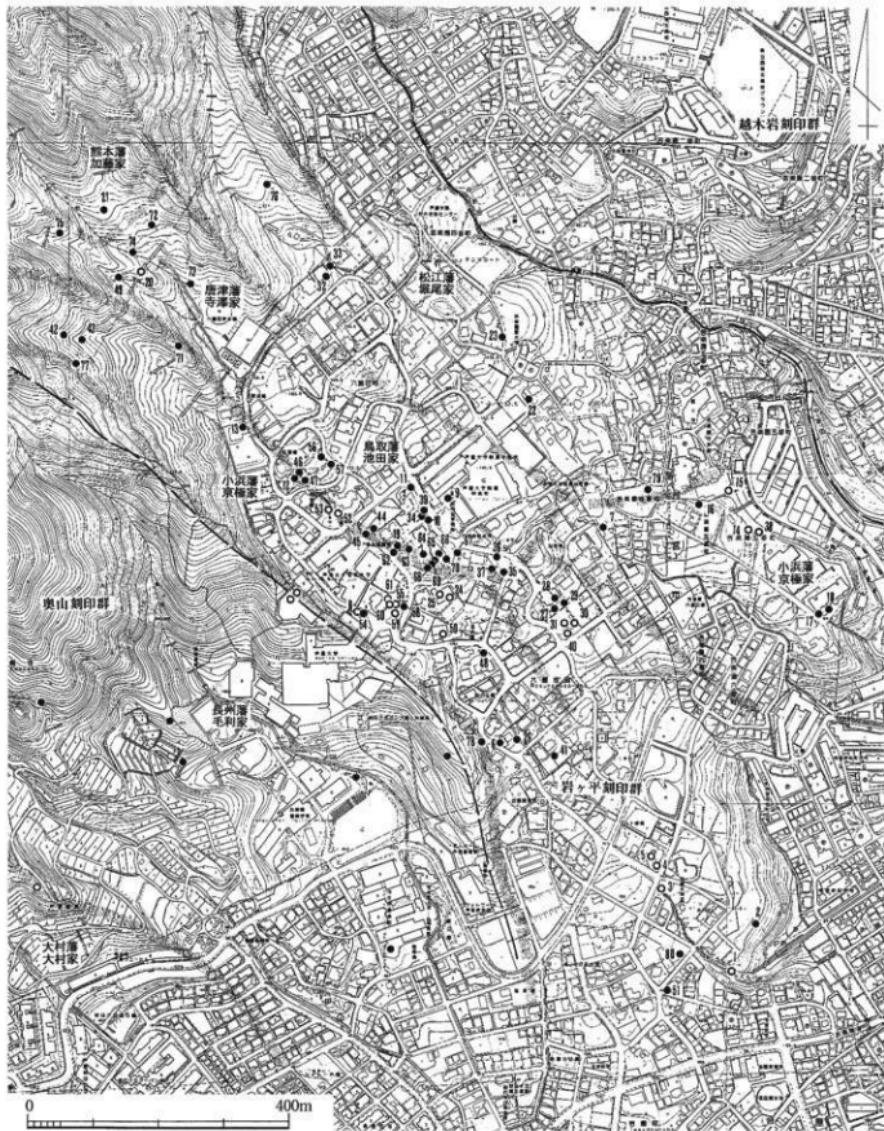


第21図 海清寺南天棒石碑の赤穂藩池田家刻印



第22図 宮川川床に遺存する調整石群

（古川久雄）



第23図 岩ヶ平刻印群刻印石分布図 (1/7500)

表4 岩ヶ平刻印群刻印石一覧

刻印欄の破線は別面を示す（2003年1月現在）

番号	刻印	所在地 ()は旧所在地	刻印寸法 横×縦cm	石材種	刻印面	現状・所見
1	△	(芦屋市岩園町104番地)	30×27.5	自然石	自然面	芦屋市立美術博物館に移設展示。
2	△	芦屋市岩園町24番地	22×9.5	割 石	割 面	山林内に原状保存。
3	○	(芦屋市岩園町52・53番地)	23×21	自然石	自然面	芦屋市立岩園小学校に移設保存。
4	△	芦屋市岩園町45番地		自然石	自然面	マンション建設により消滅。
5	○	芦屋市岩園町45番地		自然石	自然面	マンション建設により消滅。
6	①	芦屋市六麓荘町142番地	28×29	割 石	割 面	国際ホテル（現芦屋大学）建設に伴い発見。現地に移設。
7	◇	西宮市苦楽園四番町76番地	21×21	自然石	自然面	個人邸前に原状保存。
8	◎	芦屋市六麓荘町188番地	29×24.5	調整石	自然面	芦屋大学構内。石垣に転用。
9	○	芦屋市六麓荘町60番地	径31	自然石	自然面	芦屋学園中高部構内。石垣に転用。
10	○	芦屋市六麓荘町77番地	38×36	自然石	自然面	個人邸、門前に移設保存。
11	○	芦屋市六麓荘町76番地	32×33	自然石	自然面	個人邸、車庫横の石垣に転用。
12	①	芦屋市六麓荘町28番地	28×28	自然石	自然面	個人邸（空家）内。
13	① ①	芦屋市六麓荘町7番地	27×27 28×28	矢穴石	自然面	個人邸内に現地保存。 矢穴列を挟んで2刻印
14	回	西宮市苦楽園五番町2	18×16 18×17	自然石	自然面	宅地造成に伴い撤去消滅。
15	回	西宮市苦楽園五番町2		自然石	自然面	マンション建設に伴い消滅。
16	□	西宮市苦楽園五番町2	19×17	自然石	自然面	山林内に原状保存。
17	Ⓐ	西宮市苦楽園五番町2	32×32	自然石	自然面	児童公園内に移設保存。
18	回	西宮市苦楽園五番町2	22×22	自然石	自然面	児童公園内に移設保存。
19	回 □	芦屋市六麓荘町74番地	14×14.5 20×21 5×5.5	矢穴石	自然面	個人邸の建設に伴い発掘調査。邸内に原状保存。
20	工 □	芦屋市字鶴谷2番町	12×18 29×27	割 石	自然面	堰堤築造工事に伴い消滅。
21	○	芦屋市字鶴谷4番町	37×37	割 石	自然面	水源地裏の山林内に原状保存。
22	◎	西宮市苦楽園四番町4	21×23	自然石	自然面	芦屋学園中高部構内。
23	◎	西宮市苦楽園四番町7	21×23	割 石	自然面	道路沿いの石垣に転用。
24	① 八	芦屋市六麓荘町99番地		調整石	自然面	住宅建設に伴い埋没。
25	①	(芦屋市六麓荘町99番地)	28×28	自然石	自然面	芦屋市立美術博物館に移設保存。
26	回	芦屋市六麓荘町142番地	25×25	割 石	割 面	国際ホテル（現芦屋大学）建設に伴い発見。現地に移設。

番号	刻印	所在地 ()は旧所在地	刻印寸法 横×縦cm	石材種	刻印面	現状・所見
27	☆ □	芦屋市六麓荘町113番地	18×17 20×18	自然石	自然面	個人邸内に保存。現状未確認。
28	△	芦屋市六麓荘町113番地	30×15	自然石	自然面	個人邸内に保存。現状未確認。
29	□	芦屋市六麓荘町113番地	17×17	自然石	自然面	個人邸内に保存。現状未確認。
30	△	芦屋市六麓荘町121番地	32×14	割石	自然面	宅地造成に伴い埋没。
31	○ △ □	(芦屋市六麓荘町121番地)	27×29 27×20 37×16	自然石	自然面	同一面に3刻印。○の内部不明。 宅地造成に伴い消滅。
32	◎	芦屋市六麓荘町2番地	18×21	自然石	自然面	個人邸内に保存。小説板あり。
33	◎ ×	芦屋市六麓荘町2番地	23×21 19×18	割石	自然面	個人邸内に保存。小説板あり。
34	集	芦屋市六麓荘町76番地	32×55	自然石	自然面	個人邸。車庫横に移設保存。
35	集	芦屋市六麓荘町101番地	27×41	自然石	自然面	空地(山林)に原状保存。
36	集	芦屋市六麓荘町101番地	28×46	自然石	自然面	空地(山林)に原状保存。
37	集 □	芦屋市六麓荘町101番地	23×36 11×16	自然石	自然面	空地(山林)に原状保存。
38	回 □	西宮市苦楽園五番町2	13×13 18×20	自然石	自然面	宅地造成に伴い撤去消滅。
39	集	芦屋市六麓荘町76番地	17×39	自然石	自然面	個人邸。断削の上、車庫横に移設。
40	主	芦屋市六麓荘町121番地	9×20	自然石	自然面	宅地造成に伴い埋没。
41	白	芦屋市六麓荘町170番地	20×25	自然石	自然面	個人邸内に保存。現状未確認。
42	回回	芦屋市字鰐谷2番地	21×20	調整石	自然面	水源地裏の山林内に原状保存。
43	○	芦屋市字鰐谷2番地	20×20	調整石	自然面	水源地裏の山林内に原状保存。
44	○	芦屋市六麓荘町79番地	20×21	自然石	自然面	個人邸内に保存。現状未確認。
45	○	芦屋市六麓荘町79番地	22×22	自然石	自然面	個人邸内に保存。現状未確認。
46	集	芦屋市六麓荘町28番地	25×58	自然石	自然面	個人邸(空家)内。No12の横。
47	○	芦屋市六麓荘町28番地	(28×28)	自然石	自然面	個人邸(空家)内。
48	①	芦屋市六麓荘町131番地	31×32	自然石	自然面	邸宅門横に設置。
49	て 」	芦屋市字鰐谷2番地	16×17 12×19	割石	自然面	水源地裏の山林内に原状保存。
50	□	芦屋市六麓荘町94番地	7×8	割石	自然面	個人邸建設に伴う発掘調査で検出。
51	②	芦屋市岩園町32番地	27×36	自然石	自然面	小割りの上、石祠の屋根石に転用。
52	○ △	(芦屋市六麓荘町40番地)	24×23 15×14	矢穴石	自然面	個人邸建設に伴う発掘調査で検出。 断削の上、若宮町公園に移転保存。

番号	刻印	所在地 ()は旧所在地	刻印寸法 横×縦cm	石材種	刻印面	現状・所見
53	① 口	(芦屋市六麓荘町40番地)	25×(25) 33×9	矢穴石	自然面	個人邸建設に伴う発掘調査で検出。 断削の上、若宮町公園に移転保存。
54	①	(芦屋市六麓荘町83番地)	28.5×28	調整石	割面	芦屋学園サブグランド建設に伴い移設。
55	△	芦屋市六麓荘町83番地	19×13	割石	自然面	芦屋学園サブグランド建設に伴い埋没。
56	隼 ②	芦屋市六麓荘町24番地	26×44 35×33	自然石	自然面	個人邸建設に伴う調査で検出。同 一面に2刻印。
57	隼	芦屋市六麓荘町24番地		自然石	自然面	巨石。個人邸門檻に原状保存。
58	①	芦屋市六麓荘町83番地	33×33	調整石	割面	芦屋学園サブグランド建設に伴い移設。
59	□	芦屋市六麓荘町83番地	9×9	矢穴石	自然面	芦屋学園サブグランド建設に伴い埋没。
60	△	芦屋市六麓荘町83番地	19×13	自然石	自然面	芦屋学園サブグランド建設に伴い埋没。
61	□	芦屋市六麓荘町83番地	13×6	自然石	自然面	芦屋学園サブグランド建設に伴い埋没。
62	△	芦屋市六麓荘町74番地	11×9.5	割石	自然面	個人邸建設に伴う調査で検出。
63	回	芦屋市六麓荘町74番地	12×11.5	矢穴石	自然面	山林内に原状保存。
64	回 ②	芦屋市六麓荘町72番地	13×13 20.5×22	自然石	自然面	山林内に原状保存。
65	隼	芦屋市六麓荘町72番地	18×37.5	自然石	自然面	山林内に原状保存。
66	○	芦屋市六麓荘町72番地	24×23.5	自然石	自然面	山林内に原状保存。
67	隼	芦屋市六麓荘町72番地	24×58.5	自然石	自然面	山林内に原状保存。
68	②	芦屋市六麓荘町72番地	27×25	自然石	自然面	山林内に原状保存。
69	口 回	芦屋市六麓荘町72番地	6×6 15×14	自然石	自然面	山林内に原状保存。
70	隼	芦屋市六麓荘町72番地	12×42	自然石	自然面	山林内に原状保存。
71	回	芦屋市字鰐谷2番地	13×13	自然石	自然面	山林内に原状保存。
72	て	芦屋市字鰐谷4番地	21×22	自然石	自然面	山林内に原状保存。
73	て	芦屋市字鰐谷3番地	11×12	自然石	自然面	岩ヶ平刻印群12次調査 原状保存
74	# 木	芦屋市字鰐谷3番地	11×10 6.5×5	矢穴石	自然面	堰堤北側の石塊群中に原状保存
75	△	芦屋市字鰐谷2番地	12×10	割石	自然面	堰堤南東側の移動石群中に保存
76	◎	芦屋市字鰐谷6番地	26×26	自然石	自然面	山林内に原状保存。
77	○	芦屋市字鰐谷2番地	28×48	自然石	自然面	山林内に原状保存。
78	丈	芦屋市六麓荘町131番地	23×16	割石	自然面	岩ヶ平刻印群13次調査 埋没保存
79	◎	西宮市苦楽園四番町69番地	26×28	自然石	自然面	山林内に原状保存
80	❖	芦屋市岩園町58番地	15×14	割石	自然面	個人邸内に現地保存

表5 芦屋市教育委員会による岩ヶ平刻印群現状・確認・立会・発掘調査一覧（2003.1.）

調査次	調査期間	調査地點	刻印番号 (刻印種)	調査所見	保存対策と現状	文献
		担当者(協力者)				
1	1984.6	六麓荘町99番地 森岡秀人	24④△ 25④	八十塚I 143号墳確認調査の際 刻印石検出、24は埋没	25は現在芦屋市立美術博物館に屋外展示	(5) (6) (9)
	1988. 2~3	岩園町41番地 森岡秀人・(古川久雄)	刻印石なし	八十塚I 110号墳の攝壕状況確認調査に伴い、トレンチ断面で探査坑検出	現状埋没保存	(9)
	1988	六麓荘町142番地 和田秀寿・(古川久雄)	6④ 26鑿	26は埋蔵文化財立会調査で刻印石検出	両刻印石とも庭園内に現状保存	(7) (8)
	1989	六麓荘町170番地 森岡秀人・和田秀寿	41△	八十塚I 45・46号墳確認調査の際刻印石検出	庭園内に現状保存 現状未確認	(8)
2	1989	六麓荘町113番地1・2(高田邸) 和田秀寿・(古川久雄)	27☆□ 28△ 29□	埋蔵文化財立会調査で刻印石検出	28・29は現状保存、27は移設現地保存	(1) (8)
	1990.11 ~ 1991.1	六麓荘町120・121番地 和田秀寿・(古川久雄)	30△ 40主 31○□△	八十塚I 50号墳の周辺地形測量調査に伴う地表面観察で石材発掘坑確認	31は工事に伴い破棄 30・40は現地復元保存後、30・40も埋没保存	(10) (11) (12) (13)
4	1992.7	六麓荘町2番地 和田秀寿・(古川久雄)	32△ 33△△	埋蔵文化財立会調査	庭園内に移設現地保存 現状確認済	(3) (4)
5	1992. 9~10	六麓荘町79番地 和田秀寿・(古川久雄)	44△ 45⊕	埋蔵文化財立会調査で刻印石検出	庭園内に移設現地保存 現状未確認	(2) (4)
6	1993. 7~8	六麓荘町94番地 森岡秀人	50□	最初の採石場発掘調査、関係石材多數、石材探査坑も検出		(4) (13) (14) (15)
7	1997. 6~7	六麓荘町76番地4(真鍋邸) 森岡秀人・竹村忠洋	10△ 34某 39某	敷地内に刻印石3個、伊木刻印の34は直徑5.8mの自然石、探査坑なし	39は刻印部分を分割 前面道路沿へ移設保存	(5) (1) (9)
8	1997. 7~8	六麓荘町39番地1(比星根邸) 森岡秀人・竹村忠洋	52△ △ 53④△	刻印石は共に矢穴石、一石2刻印、他に関係石材8個確認	刻印部分を分割、春日町公園に移設保存	(6) (14)
9	1999. 4~5	六麓荘町24番地3(原田邸) 森岡秀人・竹村忠洋	56某△	刻印石は直径4mの自然石、56は刻印部分を分割 一石に2刻印、探査坑なし	56は刻印部分を分割 移設保存	(8) (14)
10	1999. 10~11	六麓荘町83番地(芦屋学園) 竹村忠洋・古川久雄	8④ 54④ 55△ 58④ 59△ 60△ 61△	径5.5mの探査坑を二ヶ所検出、保存状態極めて良好、その他関係石材多數	刻印石は8-55-59~61を現地地下保存、54-58は石垣に移設保存。関係石材も一部石垣転用	(7) (14)
11	2001. 4~6	六麓荘町74番地1~4(国光邸) 森岡秀人・古川久雄	19回 □ ⊖ 62△	19は矢穴石、62は端石。近世末~近代の石材探査坑検出	19は現状保存 62は移設現地保存	(9) (10)
12	2002. 1~3	宇前谷(六麓荘浄水場) 森岡秀人・古川久雄	72△	鹿津藩寺澤家探石場。探石遺構と建物跡、鍛冶炉跡検出。	刻印石は現地保存。関係石材は場内移設保存	(11)
13	2002. 4~5	六麓荘町139番地(福田邸) 竹村忠洋	76△	庭園工事に伴う発掘調査で出土。長州藩毛利家の探石か。	埋没地下保存	
14	2003.1.	岩園町58番地(川谷内邸) 竹村忠洋・森岡秀人・(古川)	80△△	個人邸建設工事に伴う立会調査で検出。刻石多數伴出。	個人邸内に現地移設保存予定。	

(参考文献は本文末の文献一覧参照)



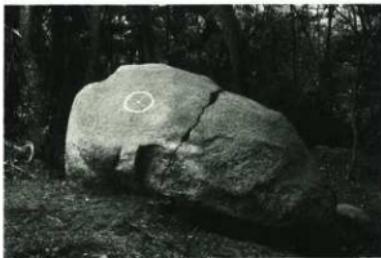
① No 5



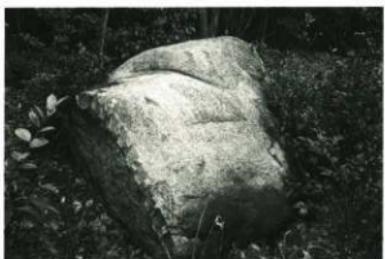
② No 4



③ No 23



④ No 66



⑤ No 30



⑥ No 40

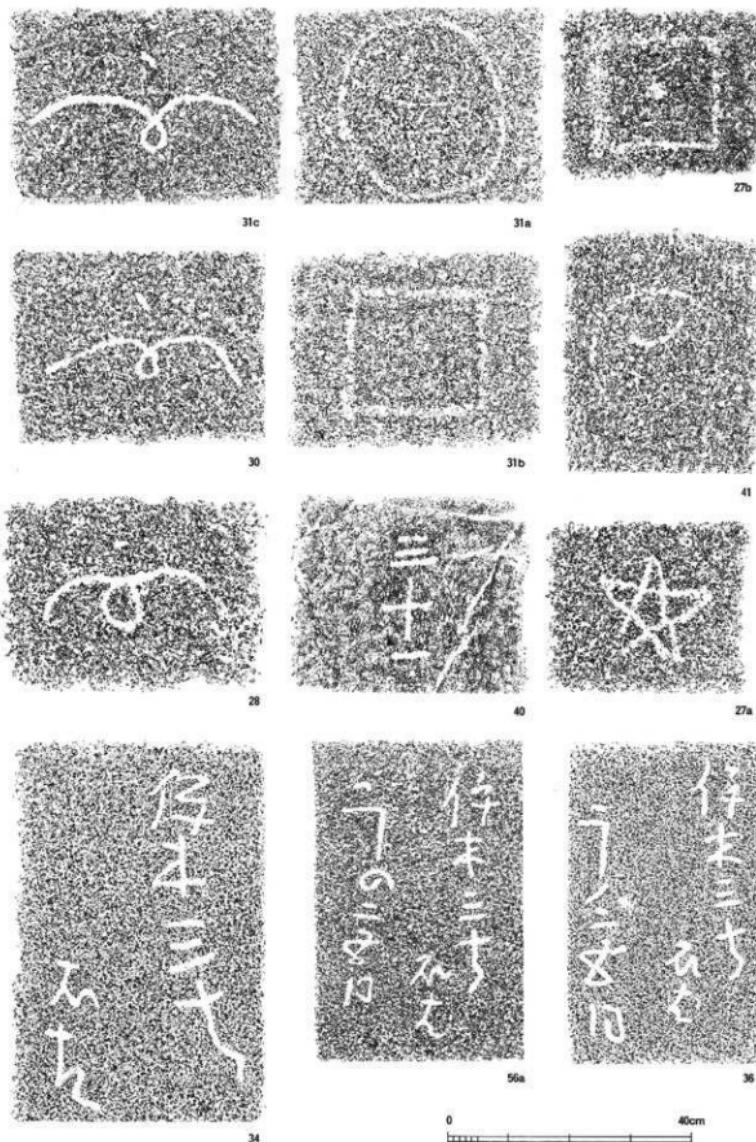


⑦ No 78

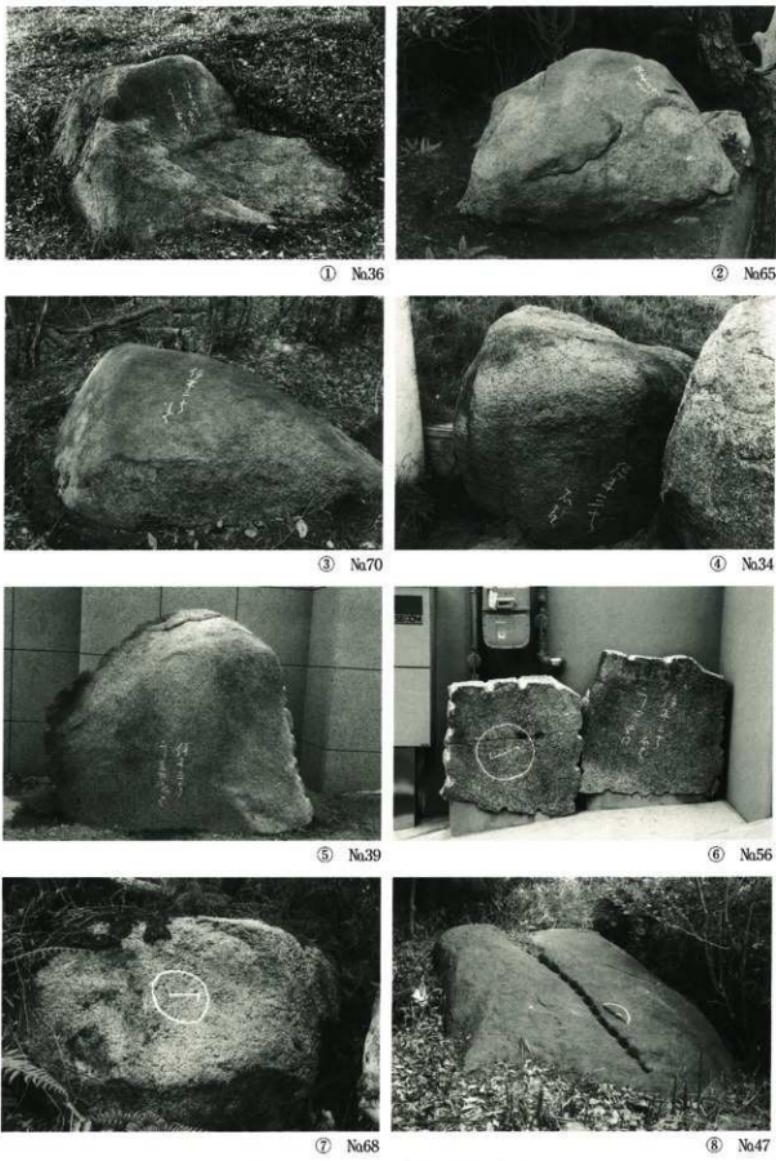


⑧ No 29

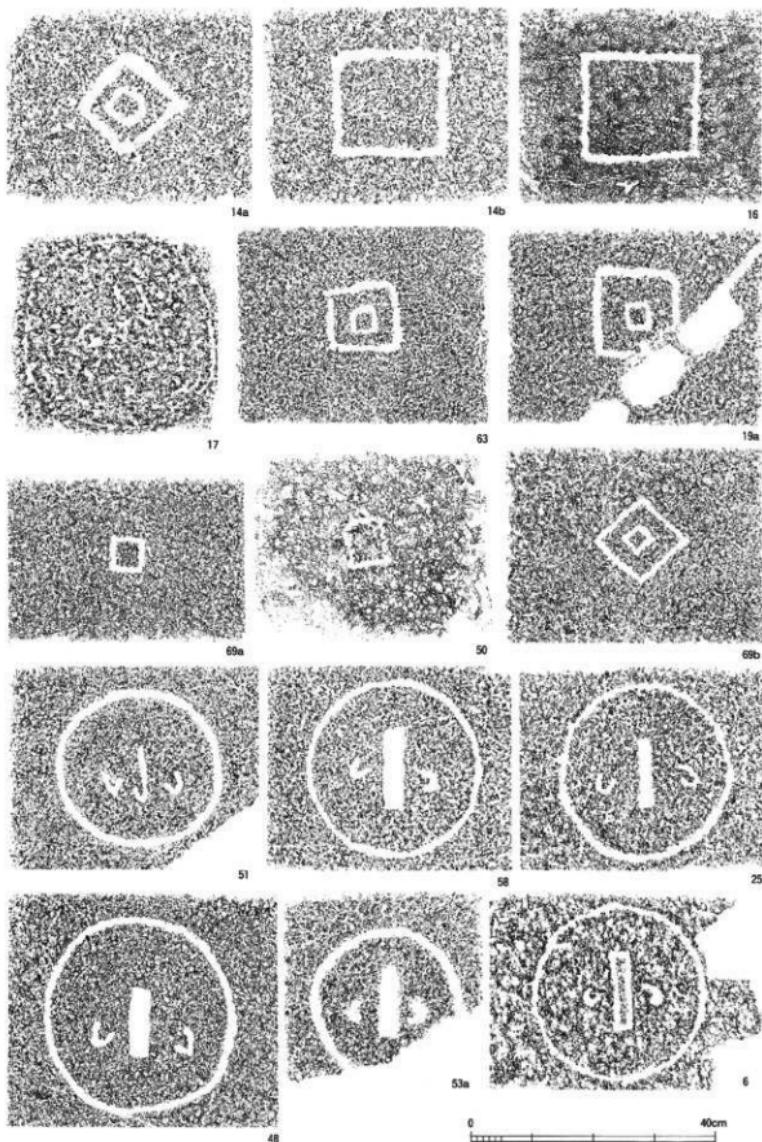
第24図 岩ヶ平刻印群の刻印石(1)



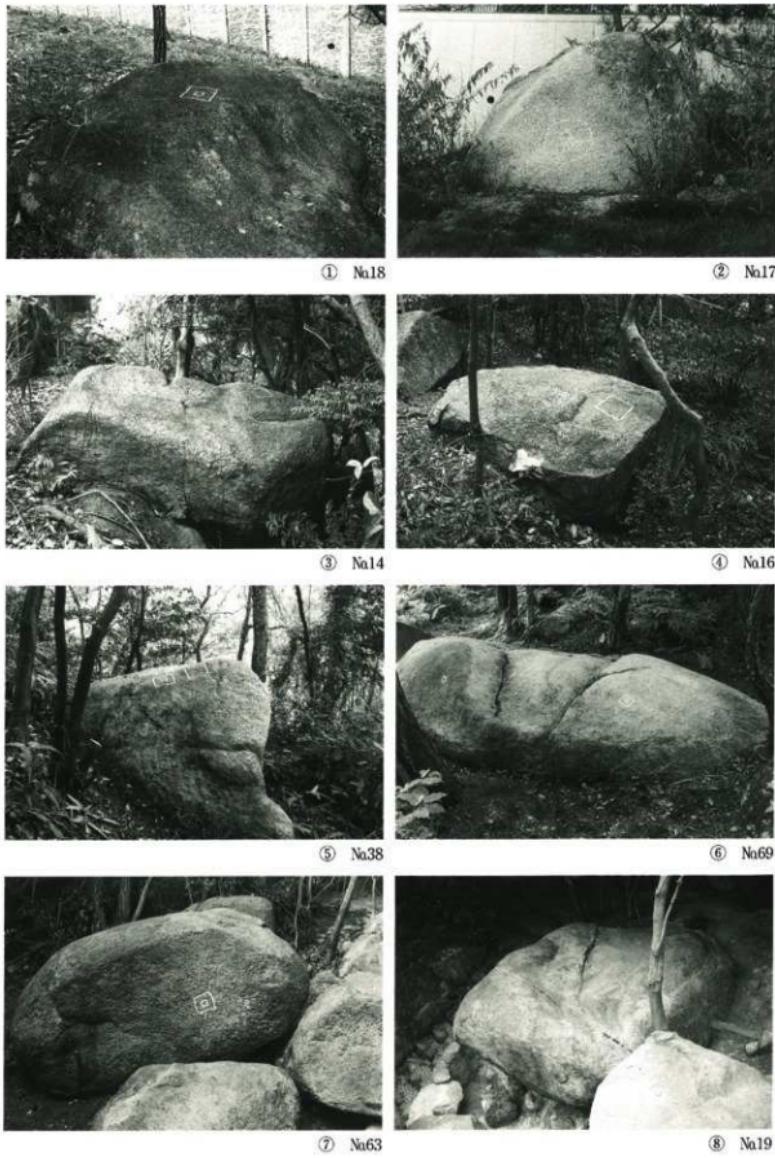
第25図 岩ヶ平刻印群刻印石拓影(1) (1/8)



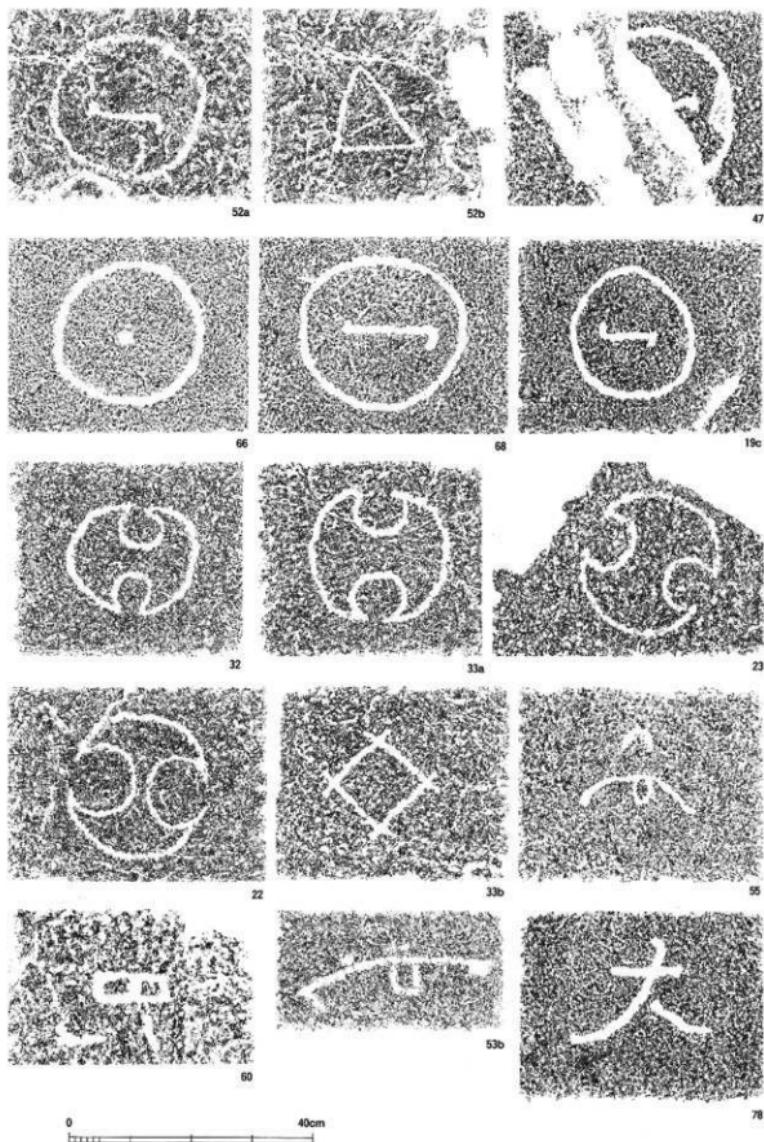
第26図 岩ヶ平刻印群の刻印石(2)



第27図 岩ヶ平刻印群刻印石拓影(2) (1/8)



第28図 岩ヶ平刻印群の刻印石(3)



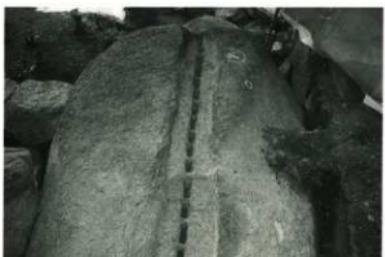
第29図 岩ヶ平刻印群刻印石拓影(3) (1/8)



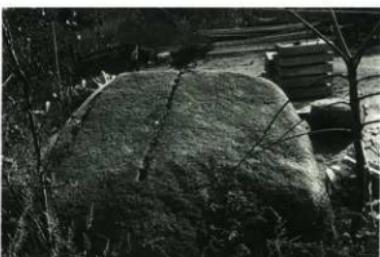
① No54



② No58



③ No53



④ No13



⑤ No45



⑥ No51



⑦ No24



⑧ No.8

第30図 岩ヶ平刻印群の刻印石(4)